

核災害に学び，未来遺産を考える

山下 俊一

Yamashita Shunichi

(長崎大学理事・副学長，福島県立医科大学副学長(非常勤))



広島，長崎の原爆被爆から70年が経過し，核災害に対する鮮烈な印象から先入観や偏見，そして風評被害が問題視される一方で，その惨劇の記憶が薄れる風化から無関心という相反する課題も深刻になっています。来年3月は東京電力(株)福島第一原子力発電所事故から5年，そして4月26日には，チェルノブイリ原発事故から30年目の節目となります。

翻って約150年前の日本では，我が国の産業革命を支えた長崎が歴史の表舞台で躍動していました。徳川幕府による鎖国時代，唯一西洋に窓を開いていた出島貿易を通じて，知識や技術が全国に展開し，明治維新後も富国強兵，殖産興業に貢献した石炭・造船・防衛にみる長崎の興亡が，ほかの関連施設とともにユネスコの世界文化遺産に登録されました。“百聞は一見に如かず”ですが，県内の多彩な石炭産業遺構には驚かされます。願わくは，近代化遺産を学ぶことで石炭の重要性から資源エネルギーの変遷を再認識し，次世代のグローバル人材育成に資する現場教育を大切にしたいと思います。

さて，現代の“核”という名称は，核実験や核兵器へとも繋がり反核運動が高まる一方で，核医学(アイソトープ診断治療)の便益さえも影が薄くなるという風潮があります。そんな中でも，原発事故に遭遇した福島県立医科大学では，県民の健康見守り事業の重責を担いつつ，ふくしま国際医療科学センターの開設に向けて着実に復興の歩みを続けています。そして，2台のサイクロトロンと10床のRI病室(1つは緊急被ばく医療対応)という充実した放射線治療施設も併設予定です。新たに指定された高度被ばく医療支援センターと原子力災害医療・総合支援センターも地域及び国内外における中心的な役割が期待されています。大変な事象に遭遇した福島において，筆者自身が，大学と社会，とりわけ医療界と世間という隔たりをこれほどまでに強く感じたことはありませんでした。正に大震災という大揺れの困難な現場で，科学者としての良心に従い行動したことが，非難や攻撃の的となる場面も少なからずありました。複合災害の中には，情報災害も入るのでしょうか。そのような渦中で，使命感と責任を持って被災者と真摯に向き合い，中長期的な課題解決に向けて多くの良識ある人々が尽力しています。継続した福島応援の中で，誰しものが生病老死という避けられない人生の歩みを，あるがままに受け入れ，感謝の心で日々安寧のうちに過ごせることが，被災者の自立と尊厳の回復の第一歩ではないかと思えます。

吉田松蔭の言葉に，「夢なき者に理想なし，理想なき者に計画なし，計画なき者に実行なし，実行なき者に成功なし，故に，夢なき者に成功なし」があります。明治近代化遺産のように福島原発事故の遺構が，未来遺産として後世に語り継がれる運命なのかは分かりませんが，一医療人としての反省と自戒を込めつつ，放射線リスク管理に資する後継人材の育成と“学問のすすめ”という教育事業推進に向けての誓いを新たにしています。